

“芸術” 座談会

日時：2017年1月17日(火) 夕刻

場所：池袋キャンパス タッカー別棟2階

進行



佐々木 一也

全学共通カリキュラム運営センター部長／文学部教授

座談者



星野 宏美

異文化コミュニケーション学部
教授 (全カリ音楽科目の担当)



黒岩 三恵

異文化コミュニケーション学部教授 (全カリ美術科目の担当)



松山 伸一

全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームリーダー／
理学部教授

大学で芸術を学ぶ意義とは

佐々木 「専門性に立つグローバル教養人」の育成を目的とした新しい全カリ、RIKKYO Learning Style (立教大学学士課程統合カリキュラム) が始めて間もなく1年になります。今後の重要な課題の1つに、言語系科目と総合系科目のうち、後者の中で一定の重みを持つ芸術科目をどう位置づけていくかということがあるのではないかと考えてい

ます。

立教大学では、現在の全学共通科目、すなわち全カリが始まる前、一般教育の時代から、芸術に関しても大変立派な先生方を専任教員として擁していました。その先生方が尽力して芸術科目をたくさん開講してくださったおかげで、学生に芸術系でない大学でありながら芸術に触れる機会、芸術を通して考える機会を提供することができてきたという実績があります。

立教大学にはいろいろなイメージがあると思いますが、その1つに、「品のよさ」というものが挙げられるのではないのでしょうか。その品のよさ、品格というのは、キャンパスの真ん中にあるチャペルがもたらす聖公会の非常にまじめな雰囲気はもちろんですけれども、それと相俟って、芸術が大学の中で確固たる位置を築いていることにあるのではないかと思うのです。

古来、西洋の学問には「真・善・美」という3つの中心的な価値がありました。ところが、近代と言いますか、少なくとも現代、我々が直面している20世紀から21世紀においては、西洋が起源の学問は「真」ばかりを一生懸命に追及しているように感じます。「真・善・美」は一体であり、学問はその「真・善・美」を追求していくものであるはずが、いまや「真」を求める感覚のみが保障され、「善」や「美」を求める心は世の中にあっても邪魔にならないならいい、というような程度にしか認められなくなってしまいました。

「美」や「善」なくして「真」は生きません。「美」というのはただ芸術作品を楽しむことではなく、世の中を正しく、幸せに運営していく際の基本となる知見なのだと思います。「善」も同様です。してはいけないこと、いいことの基準。それは必ずしも「真」のように論理的ではありませんが、美にも通じる善の感覚はとても大事なのです。そういう意味で、教育体系の中に芸術科目をきちんと位置づけていくことは、大学とは人を大切に自由な真理を求める場であるべしという立教の教育理念とも合致するものではないかと考えております。

本日は、芸術科目を担当していらっしゃる先生方に、美術や音楽など芸術を学ぶことの意義と、大学での教育における望ましい形についてお考えを伺っていきます。

星野 全カリ音楽を担当していて、常々思うのは、好きだから受講しているという学生が多い、ポジティブな科目だということです。学生たちは音楽を「美しい」、「きれい」と感じ、そのきれいなものを楽しみに来ているのですね。私の専門は西洋音楽史ですので、私の授業はすべて、いわゆるクラシック音楽を扱っています。学生も、自分が普段聴いているJ-POPなどと比較して、クラシックはとりわけきれいというイメージを抱いています。学生が期待しているのは、クラシック音楽を学ぶことを通して、心が慰められるとか、ストレス解消になるとか、そういうことなんですね。私が立教に来てまず驚いたのは、一般の若者がこんなにも疲れていて、美しいものに触れて癒されたいと願い、そのために音楽を求めているということでした。私は専門の中にずっと身を置いて



きましたので、音楽を美と捉えながらも、そこに到達するための苦しみとか、芸を磨いていく厳しさとか、むしろそちらのほうが実感としてあったので、意外でしたね。

立教で教鞭をとって16年目になります。就任当時は、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスやモーツァルトのような、明治以降の日本の西洋音楽受容に即したドイツ音楽が人気でした。まじめ

で、深刻で、聴き通すと最後に葛藤を超えた喜びに満たされるような音楽こそがクラシックであり、価値のあるものだと思っている学生が多かったですね。

現在、そういった教養型クラシック音楽愛好は減少しており、関心が多様化しています。好きな曲を尋ねると、「フィギュアスケートで使われていたあの曲」という具合に、国や時代という切り口ではなく、日常感覚やおしゃれ感覚でクラシックに触れているようです。日本が豊かになってきた過程で、音楽は教養だけでなく、さまざまな場面に入り込んできた、そこを入り口にして関心を持つ学生が増えています。昔はCMで使われているクラシック音楽なんかクラシック音楽じゃないという発想のほうが多かったように思います。現代社会の多様化を反映して、全カ力で扱う音楽の範囲は、日本音楽や民族音楽、ポピュラー音楽にも広がっていますが、クラシック音楽が立教全カ力の核であることに変わりありませんし、学生からの人気も高いです。

黒岩 いわゆるサブカルチャーと称する文化において、昨今アニメーションが「クール・ジャパン」という名のもと、視覚的な表現として学術的な場でも認知されています。しかし全学共通科目の美術科目においてそれを扱うことはありません。音楽がJ-POPやロックのような若者文化の最先端を扱わないように、大学において学問的に学ぶ美術とは、古い伝統的な美術であり、アニメーションではないということを受講する学生は理解しているようです。そこは音楽と共通している点ですね。

音楽と違うのは、美術の予備知識を全く持っていないから、全学共通科目で基本を勉強したいという学生が少数ながら一定程度いるということでしょうか。

もともとの専門との統合ということが全カ力の1つの柱ですが、多様なバックグラウンドを持った学生にどう対応するのかというのは全カ力において常に議論されてきたことだと思います。基礎と言いつつも専門にある程度またがるような教育ということに対しては課題を感じているところです。ただ、学生たちの意欲は、専門とのかかわりというより、好きだからとか、知らないけれども勉強してみたいという、純粋な興味から出発しているように感じられます。

学生が知っているつもりでいた、あるいは、何となく見たことがあるような絵画作品

を細かく分析していき、背景などを詳しく説明すると、意外な反応が返ってきてびっくりさせられることが時々あります。例えば、ベラスケスが宮廷画家として仕えていたスペイン王家を書いた有名な『ラス・メニーナス』という作品を2時間ぐらいかけて解説したところ、「感動した」というリアクションペーパーが寄せられました。

幅広く一般的なものを概説した場合には、リアクションとして何かが出てくることはあまりないですね。私たちは、テレビやインターネットの画像サービスなどによって、美術にかんする知識はある程度入ってくるとか、ごく一般的な意味での教養を幅広く知れる、いろいろな情報を得られるという社会に生きています。その中で、時間をかけて1つの作品を深く見ていくというのは、恐らく大学でしかできないことなのだろうという気がします。

とはいえ、専門教育ではないわけですから、その点でどう折り合いをつけていくのかという課題はあります。あくまで全カリの枠の中で、常に今の社会はどうなっているのかということをしきりと意識した上で、学生の期待と私が教育目的として持っているものをすり合わせたものがどこにあるのかを考えながら授業を組み立てています。

松山 理系の科目は、文系の学生にしてみれば、ある程度の基礎を持っていないと履修は難しいです。数学はできないけれども、できるようになりたいからとるという学生はほぼ皆無でしょう。でも、芸術は、絵が描けなくても、ピアノが弾けなくてもとれる。素養がなくても経験できるという点で入り口は広いですよ。もちろん、その後の知識の習得度で鑑賞の幅が広がるとか、理解の深度が違ってくるというところでは努力も必要なのでしょうけれども、癒しなり、満足なり、心の豊かさなり、成果として得たと感じられるものは人によるというのが特徴ではないかと思います。

芸術は知的冒険と発見をうながす教養である

星野 芸術のよいところは、いつでもやり直しが利くことだと思っています。中学、高校で挫折しても、大学でまた学んでみよう、あるいは、高齢者になってからでも、何か琴線に触れたときに入っていけるというように、ある意味で敷居は低いのです。

音楽は、実は非常に数学的なところがあって、例えば、曲を構築していく達成感は数式を解くのと似た感覚があります。ちょっと専門的にはなりますが、曲の構造を分析的に聴くようになると、美しいメロディーに浸るのとは違う面白さが出てくるんですね。私は全カリではそういうことも教えるようにしています。音楽が好きとか、音楽や美術をやり直したいと授業を履修した学生が、音楽には数学的な思考が関係していると気づいてくれたら、そこに、全カリで音楽を教える1つの意義があると思っています。

黒岩 数学的視点ということで考えると、例えば西洋絵画には構図に注目をするという見方があります。制作者側は当然考えることですし、美術史の議論においては、形式論

的、あるいは様式的な分析として位置づけられると思うのですが、全カリのような大人数の講義においてそこに重きを置くのは物理的に難しい面があり、あまり取り上げたことはありません。ただ、意味を読み解く中で、構図がこうなっていると、透視図法などの表現のテクニックや視覚的な特徴の説明は、作図ソフトを用いながらしています。そこからさらに進んで数字を交えて構成をとらえるというより、むしろ残されている文献資料などから、こういう解釈が可能であるという、いわゆる文系的な解釈論で締めくくる形をとっています。ですが、文系だ、理系だということではない、美術というものの持つ特性そのものをきちんと全方向的に教えるという位置づけが理想なのではないかと考えています。

星野 私は音楽を通して学生に戸惑いと驚きを与えるのも自分の仕事の1つだと思っているので、あえて難しい授業をすることもあります。もちろん嫌いになってもらっては困りますけれども、美しいものに触れる、その背後には数学的秩序があることを示すんです。授業の最初のほうで、数式を使って音の組織を説明すると、文系が多いこともあって学生の8割はもう口あんぐりです。まさか音楽の授業で数学が出てくるとは思っていないわけです。しかし、中世ルネッサンスから近代に至るまで、音楽論は数学と結びついていますから、基本的な数式は教えます。もうこれ以上は数字に踏み込まないから安心してと断りつつ、最初に具体的に教えて驚かせるんです。

音楽については、学生も自分は少しはわかっているという気持ちがありますよね。学生が既知っていることに、授業で、少しふくらみを与えると学生はすごく喜びます。でも、そこで満足してしまうのですね。数学と音楽が結びついているなどという、思いもかけない新しい事実を示し、実際にどういう計算式を使っていたかということまで1時間かけて教えると、学生は目からうろこで、わからなくても覚えてくれます。私も教えがいを感じますね。

松山 違う方面からのアプローチは、興味があるとか、好きだから履修している学生にとっては、思いがけない知識と出会うことにもなって、とてもいいことだと思います。理系の科目は、残念ながら、全学共通科目としてとらなくはいけないからとか、抽選にはずれたからという動機で受講している学生も少なからずいます。

私が担当する全カリの科目は、かつては受講生が非常に少ない科目でした。しばらく30人から50人ぐらいの状態が続いていたのですが、ある年、シラバスにたった一文、「生物の予備知識がなくても理解できる」と入れたら、受講生が爆発的に増えたんです。物理の宇宙の授業をされている先生が、宇宙の話をするけれども基本的な物理の予備知識はなくても理解できる内容です、という説明を入れたら、受講生が一気に300人ぐらいになってしまったという話をされていたので、私もまねしてみたんです。結果、200人ぐらいになりました。話す内容は全く変わっていないんですけども。学生たちは潜在的な関心は持っているけれども、ある種のハードルの高さを感じて尻込みして

しまっている面があるのだと思います。そもそもそんなハードルは存在しないと示すことによって安心するわけです。星野先生が言われたように、学生は驚きとか、目からうるごとといった知的刺激を求めていますし、それを与えることは教える側にとっても喜びです。身近なところを教えていると、わりと食らいついてきますよね。

黒岩 目からうるご的な体験をさせることは、出発点だと思います。それだけで終わってしまうのではなくて、学生がみずから知識を求め、気づきを得るところまでもっていかたいいなと考えています。

大人数の講義ですと、レポートを課すことがなかなかできない代わりに、リアクションペーパーを使って課題を与えたりするのですが、少し前までは結構面白いことを書いてくる学生がそれなりの数いたような気がします。最近では、ある意味受動的になってきていて、本当は「面白かった」、「よかった」というところから、この授業を踏まえて自分で考える場合にどういった考えの枠組みができるかまで進んでくれることを楽しみにしているのですが、なかなか聴衆、オーディエンス的な立場から一步踏み出すということがない。どんどんよい子ちゃんになってきている感じで、私の問いかけの仕方がまずいのかもかもしれませんが、どういうふうの問題提起をしていくのがいいのかなというのが課題としてあります。

社会の現状と照らして教育を考えた場合、社会全体が経済的にちょっと厳しい状況になると、途端に学生も就職ということを最優先して大学生活を送るようになりますよね。やはり真っ先に力を入れなければいけないのは言語の習得であったり、技術系の科目になってくるわけです。全学共通科目においてもその傾向が見られると思います。そうすると、芸術科目がある意味であおりを受けるというか、初等教育の段階から実技を含めて継続的に科目が置かれてきた芸術というものが、高等教育である大学においてはどういう意味を持つのかということが議論されつつも、なかなか議論が進んでいかない。あるいは、一般的にもそれを議論しなければならないという危機感が共有されていないのではないかと思います。教養という概念が浸透していないのですね。結局、学生がみずからそれを発見して、ある種の力とし、楽しみとして、大学を出た後の生活に結びつけてくれるといいなという他力本願的な側面があるのが、大学における芸術科目のジレンマです。

佐々木 そこはカリキュラム全体の仕組みとして考えていかなければいけない問題だと思います。大事なのは「学びの精神」ですよ。大学で身につけていくべき力とは何か、どのような姿勢をもって大学での学習に取り組まなければならないのか、ということのを、やはりいろいろな分野、チャンネルを通して教えるということですね。「真・善・美」が基本だということをバランスよくトータルに養っていかないと、どんな場合でもくじけずに自分の道を見つけ出していくような粘り強い知力というのは育たないのだということ、やはり徹底しなければいけません。

松山 私が高校生のころは文系も理系も関係なく、教科はひとつおり全部学びました。社会科なんか日本史、世界史、地理、倫理社会、政治経済の5科目あったし、理科も物理、化学、生物、地学の4科目ありました。今はほとんど選択制で、ある時点から一切触れない科目というのもあるわけです。とりえず何でも学んだという総合的な力がなく、大学に来て初めて接する科目もあります。やはり大学の教養教育にはいろいろなことを経験させるという視点が必要なのだと思います。

私は学問を教えるというよりは、むしろサイエンスリテラシーなど、様々なリテラシーを教えるようにしています。私は専門では生化学を教えているから、ふだんはタンパク質とか、ビタミンとか、そういうものが体の中でどんな反応を起こしているかという話をしています。それを全学共通科目に持ってくると、栄養の話になるんです。栄養と関係のある食の問題や健康の問題といったリテラシーを身につけさせる感じで教えています。いろいろと飛び交っている情報をきちんと理解し、取捨選択して正しい判断ができるようにするという視点で臨んでいます。同様に、アートリテラシー的なアプローチも学生は求めているのではないかと思います。

ネット社会の功罪—もっと本物に触れる機会を

佐々木 現在全学共通科目では完成期向けの科目も用意できるようになっています。対象が芸術系の学生でなくとも、もう少し本格的に芸術を扱い、より高度な内容を組み込んだ少人数の授業というのも面白いかもしれませんね。

全学共通科目には、大学入門の「学びの精神」と、メインである「多彩な学び」、それと「立教ゼミナール発展編」という3段階がありますので、芸術を上手に取り入れて、ほかの分野にも資するような美的意識、驚き、喜びというものを経験させる。できれば、学生自身が、これは音楽だから「美」が問題になるのであって、自分の専門の経営学はお金もうけだから関係がないと、切り離して考えるのではなく、「美」と経営システムの構築は相互につながっているという認識を持ち、普遍的素養として美的センスを身につけてほしいですね。

今の世の中の流れとしては、品というのはあまり重視されず、結果がすべてである、結果を出しさえすればよいといった風潮があるように思います。それが人を過労死に追いやったり、弱者を顧みない人間をばびこらせたりしているのではないのでしょうか。立教大学の品のよさというのは、そのような風潮に迎合する人間を育てないということだと思います。それには立教の芸術科目が寄与してきたのではないのでしょうか。

黒岩 美術というのはコストがかかるものなので、歴史を振り返っても権力との親和性が極めて高いという現実があります。近代の個人アーティストの表現が可能になる時代の前には、長らく権力とのお付き合いがあったがゆえに壮大なところまで発展したというのは、日本でもそうですし、西洋においては特にそうです。

きれいであるという、まさに造形芸術的な特性としての美しさの裏には、権力的なもの、基盤ががっちりあるわけですね。美術にはそういう若い人には見えてこない人間社会の複雑さという問題があるので、美しさというものの持つ両義性というのですかね。そういったものが実はあると知ることも大事だろうと思います。



すぐれた経営者がすぐれたアートコレクターだったりするというのは、現在でも非常に多い例です。専門家でなければ芸術と関われな、分からないというものでは決してありません。エリート主義的な面も否定できませんが、実は芸術というのは一握りの人間のためのものではなくて、そもそも人間の活動の根幹にかかわるものなのです。自分とも身近であるし、身近でないとしても、自分が今住んでいる社会の中で、現在もまた起こりつつある活動の1つなのだという芸術の多様性は伝えたいと考えています。

松山 経済とか、人種とか、ジェンダーとか、芸術はそういった問題と無関係でないというのは、いろいろな社会や歴史を通して学ぶべきことではありますね。それが基盤になってさらに鑑賞する力を養っていけるということですよ。

佐々木 芸術作品だけではなくて、かつては学問一般、知的文化というのは支配階級のものだったわけですよ。リベラル・アーツ、自由な学術はもともと自由民のための学問でした。自由民というのは支配階級ですから、今の世で言う高額所得者みたいなものですね。しかし、今は、高額所得者と我々みたいな庶民との間で、文化、学問、芸術への距離の差は縮まってきました。個人が広大な宮殿の中に絵を飾るとかフレスコ画を描かせるというのではなくて、税金で運営している公共の美術館などを通じて、我々も容易に芸術、文化にアクセスできるようになりました。

星野 クラシック音楽の日本における普及を迎っても、かつては、ピアノがあるのは家の中で靴をはくような別格のお宅だった時代がありました。私の時代はもう、団地住まいでもピアノを購入し、子供に習わせるというように広がりましたけれども、今はさらにピアノでなくて電子ピアノでもいいし、あるいは、音楽をわざわざ聴きに行かなくても、YouTubeなどで何でも聴けてしまう。かつてはヨーロッパまで行かなければ聴け

なかったような音楽が、今や誰でもどこでも聴ける時代になっているんですね。本音を言うと、本物に触れなければ、本当の美や品性は身につかないと思うのですが、現実には、YouTubeだけでしかクラシックに触れないような学生がこれから増えてくる。一生、音楽を生で聴かない。そんな時代になるかもしれないと考えています。大衆化が進むのは、一面ではよいことですが、せっかく本物に触れる機会があっても触れようとしない時代にもなっているのは悩ましいところです。

黒岩 学生がなかなか実物を見に行こうとまではしないのは、美術でも見られる傾向ですね。また、最近、こんな現象も起きています。コメントペーパーは一応、授業の内容を踏まえた上で書いてもらうのですが、途端にスマホを出す学生が多いですね。書いている間じゅうずっとスマホを見ている学生もいます。検索すればネットに何か出ているのだろうと思っているのでしょうか。

授業では、それぞれのテーマごとに参考文献などを用意し、パワーポイントを使って進めているのですが、必ず立教の図書館で見ることができると一瞥して付けています。残念ながら文献自体が少なく、あっても英語のものが多く、授業ではそんなことを踏まえてお話ししています。日本語ではほとんど聞けないような話をしているということを説明しているつもりなんです、どうやらインターネットには何でもあると思ってしまうごく少数の学生がいて、自分の考えを書けという応用問題の答えは、もう誰かが考えて書いていてくれると思ってスマホに頼りだすんです。

YouTube云々というも同根の問題だと思います。利用可能な音楽のソースが豊富にあっても、積極的に利用するというよりは、そこに行きさえすればきれいなものに出会えるかもしれないという受け身なんですよね。当たり前前にネット環境がある環境で育ってきた今の学生たちとのジェネレーションギャップの中で私たちはリテラシーを共有していかなければならないわけです。世界観の認識が違う学生たちを私たちのほうに引きつけるよりも、私たちが向こうに行くことによって何らかの解決を見出さなければいけないのかなと思いはじめています。

多様な教育環境が教育の質を高める

星野 受け身ということに関して言えば、受講人数で教室の雰囲気は確実に変わってきますね。もちろん授業の進め方も大人数が少人数かで違いはありますが、100人を超えてしまうと、学生はみんな受け身で授業を聴いている印象です。

私は今年全学共通科目の授業で受講生が1桁のクラスを持っています。すごくいいですよ。スマホなんか見ている暇はありません。みんなで議論し合いますし、一緒にオペラを見に行ったりもして、これまで音楽にさほど詳しくなかった学生でも、自分の関心事、例えば、ナショナルリズムに結びつけて音楽作品を語るようになっていきます。粘り強い学生が集まったのかもしれませんが、どのレベルの学生でも、なるべく少人数

の中でもんでいけばいいのでしょうね。全体の雰囲気がいいと、学生の学び意欲も格段に上がります。

黒岩 多彩な経験という意味では、大人数も決して悪いことではないのかもしれませんが、確かに講義の内容を考えていく上でも、教室の規模は重要です。全カリセンターの中で引き続き考えていっていただきたい問題です。

星野 欲を言えば、視聴覚設備の整った大小の教室があり、演奏会や展覧会にも使える芸術棟のようなものができるといいなと思います。

黒岩 池袋モンパルナスではないですけども、芸術と歴史の兼ね合いで見ると、セゾン美術館が閉鎖され、芸術の池袋というカラーが喪失されつつある中で、芸術劇場が舞台芸術で頑張っている状況ですよ。やはり立教が豊島区との交流といった事業ばかりでなく、みずから何か、ハコ物ではないですが、持って発信することによって、おのずと周辺のコミュニティと、それから大学の中でさらにいろいろなことができていく可能性があると思います。それがまた全カリと有機的に結びつくことで、芸術科目の位置の意味合いをもっと形に見えるものとして実感され得るのではないかというのは、常々感じているところです。

佐々木 やはり美しいものというのはリベラル・アーツの根幹ですよ。その「美」の部分を支えていって、「真・善・美」と相俟って教養となり、その教養が1つ1つの専門を生かしていくとすれば、非常に大事な分野であると思います。だから、「美」を大事にするということは、立教の教育理念の表看板にかかわることだと私は考えています。

そういう意味では、立教大学で芸術教育の条件をさらに改善するための要望は、全カリセンターとして声を大にして言い続けていかなければならない課題なのだと思います。

今まで総合系科目の中で芸術科目を特に取り上げる機会が十分でなかったのが、今後、総合系科目の理念に魂を込めるに当たっては、やはり芸術科目でのこ入れが必要です。そうすることで、ほかの分野にも「真・善・美」の総合として教養が育つように影響が波及するようになれば理想的だと考えています。

松山 芸術を通して世の中を見る、みたいに、芸術はいろいろな問題を考える有効なメディアになると思います。

佐々木 一口に音楽や美術といってもいろいろなカリキュラムが考えられるわけで、今まで開講してきた「音楽と社会」とか「美術と社会」というような科目にまた工夫を加えて、教養全体を見据えた科目として特化させるとか、「立教ゼミナール発展編」あたりで、芸術をテーマにしたものを出していただくといいのではないかと思います。

黒岩 芸術分野の科目は開講数が増えるなどしてかなり大きく変化していますが、内容とか企画に関しては、特に美術の場合、比較的小人数ぐらいのものを踏襲している部分があるので、新たな枠組みというのを考えるべきときに来ているかもしれません。

佐々木 企画提案型の科目は柔軟な運用ができるので、いろいろなものを実験してみるにはいいですね。専門科目ではそういうことはあり得ないですよ。全学共通科目だからこそできることです。これは全学共通科目の利点なので、ぜひ生かしてほしいです。

松山 星野先生が言われたように、学生がオペラを実際に観る経験を通じて社会を考えるといったことができるようになったということは、芸術が教養として身についたことを実感できたということだと思うんですね。少人数の企画提案型科目はもっと増やしていけるといいですね。学びたい人だけが学びに来る環境というのは、学生の学ぶ意欲をさらに高めることにつながると思います。

目指すは知性と感性の陶冶による人間教育

松山 理系の学問は、ひたすら真実に向かって突き進む、みたいなところがありますが、芸術科目は、どこに向かうのか、受け取る側によって感じ方も違うし、なかなか難しいところですよ。先生方にも専門の方向性があるでしょう。こっちの方向に進めていきたいと思っても、実際にはいろいろな価値観があるから、自分のスタイルで教えてしまうと、受け取る学生の基準というか、芸術に対する座標軸がそこでできてしまうような気がします。そういう相対的な評価を伴う学問を教える人たちは、悩まれる場面が多いのではないかなと思うんです。感じ方や価値観は人それぞれだから、いろいろなものを好きに感じてもらえればいいと思っておられるのかもしれませんが、学生の受け取り方によっては、その芸術をあまり正しく理解できないとか、変な座標軸を持ってしまうといった危険性のようなものをお感じになることはありますか。

星野 私はむしろ、音楽も真実の追究だと考えています。感じ方は人それぞれという意



味では、真実も人それぞれで、たくさんありますけれども、本人が追求しているときは1つなんです。「美」は普遍的であるのか、芸術は趣味の問題であるのか、本物の芸術と偽の芸術があるのか、あるいはさまざまな個性のいずれもが素晴らしいのかなど、時代と社会によっていろいろな考え方が形成されてきました。そ

うした学問的なことも大切ですが、それ以上に、この私がこの音楽になぜ感動するのかという点のほうが、私には真実味があります。

ところが、自分が真実を語っていると思い込むと、おっしゃるとおり、みんな違うことを考えているので話が通じないんですよ。自分は真実だと思っていたのに、みんなでわかり合えると思っていたのに、違った。そこでボロボロになる経験をするんですね。自然科学と比較して、学問的脆弱さを指摘される所以でもありますが、教えている立場では、危険性よりは面白さを私は感じます。今の学生は、音楽はきれいと言うのに加えて、みんながわかり合えると言うんです。言葉は通じなくとも、音楽は国境を越えるとか、どんなにつらくて悲しいときも、例えば、東日本大震災のようなときでも、歌を歌っていれば、みんなで元気になって日本が再生する、みたいなね。音楽を通して絆が生まれると考え、まとまった気になっているのですけれども、本当かと。同じ音楽でも受けとめ方は全然違うんだということを逆に気づかせるために、私は、私の感じることを、考えていることを強く伝えていきます。その上で、リアクションペーパーに各人の意見をできるだけ明確に書かせ、授業中に共有するようにしています。学問的に客観的に教えるより、思い切って私のアイデンティティを出してしまって、学生のリアクションペーパーで相対化するというのを試しています。

これは主教で全学共通科目を担当するようになって確立してきた方法かもしれません。だから、自分自身、授業をしていてすごく勉強になりますね。

黒岩 美術の場合は、常にある一定の時代、ある一定の地域に暮らしていた個人なり集団が残したものを扱っているというところがあるので、その選択の中に偏りができるかもしれません。こういう特定の歴史的な位置づけですよということを提示した上で話すようにしています。絶対的な美とは何かということを表立って学生に対して話すことはないのですが、美術の起源は何なのかというのを導入にしています。

それは旧石器時代のマドレーヌ期とか、あの辺の洞窟壁画として偶然残っているものから知ることができるのですが、ちょうどクロマニヨン人とネアンデルタール人の交代の時期に当たるんですね。その辺のことは専門でないので芸術に限って言うならば、やはり前頭葉が発達したということ、そして言語が出てきたこととパラレルに視覚表現、つまり顔料を塗って、それを動物だと認識するということが出てきたということを講義の初回に問題提起の一環として紹介しています。

何かで視覚的に表現するということは、言葉を使うのと同じぐらい根源的な人間の知的活動の1つであるということをもまず押さえた上で、そうであるからには、究極的には、人間とは何なのだろうか。これまで人間がやってきたことは何なのかというのが一番根本的な問いとして出てくるわけです。そこから生じる多彩さこそが芸術なのだとならえ、美というものを一緒に考えていく出発点にしています。

美とは何ぞやということをも直接、学生に対してぶつけることはしていないので、松山先生がおっしゃる真実というのとはちょっと違うのかもしれないのですが、美術という

ものを通じて人間とは何なのかを考えることが真実の探求だとすると、そこを目指しているのかなという感じはしますね。

ただ、それは非常に深い問題ですから、目的だと断定してしまうと専門領域に踏み込むことにもなり、全学共通科目の枠を大きく超えてしまうように思いますので、バランスには気をつけています。ちょっと勉強する学生だと、それは文学でもあり哲学でもあり、いろいろなことの根底だと了解してくれるのですけれどもね。とりあえずちょっと絵の見方がちゃんとわかるようにするところから始めましょうねという姿勢で臨んでいます。

佐々木 私は哲学分野ですから、教養という観点で考えると、人間とは何かという根源を問うところまで行っていただけるといいなと思いますけれどもね。

星野 私は今、立教で授業をしていて、人間とは何かを語っているような気がしています。音楽には美の要素も、数学的な秩序もありますけれども、基本的にあるときにポツと始まってあるときにポツと終わってしまうものなんですよ。人生はこれと一緒に、突然始まって突然終わる。音楽の理論が少しわかってくると、今が始まりで、今が真ん中で、真ん中の最初寄りか、真ん中の終わり寄りかという見当がつくようになるんですね。中には突然切れてしまう曲もあって、人の一生と同じだよねとなぞらえてみるんですが、音大ではこんな話は絶対にしなかつただろうと思います。例えば、和音の使い方から音楽の本質に迫ることはできても、人生と同じだよねという本質は音大ではなかなか意識できません。最初はこそばゆかったですけども、全カ力は教えていて面白いですね。

佐々木 全学共通科目という場で教えることによって、音楽や美術といった芸術が学生の人格形成や人としての成長に資する科目となっているということですね。これこそが立教の芸術科目の1つの特徴と言えるのではないのでしょうか。本日は全学共通科目総合系科目についての芸術科目の意義から人間形成の根幹にかかわる話まで展開していただきました。どうもありがとうございます。